

創造性のある幼児を 育てるために

片岡 靈 恵



結論からさきに言わしていただくと、「創造性のある幼児を育てるために」最も大切な要素は、幼児自身よりもむしろ、彼らの周囲のおとなたち―両親家族や教師を含めて―の創造性であると、わたくしは思う。

まだ入園前の二、三才の幼児の言動をみているとよく分るように、こどもは、もともと、溢れるばかりの創造性の芽ばえを与えられて生まれて来ている。何物にもとらわれず天衣無縫に振る舞う彼らは、何と自由で、個性的で、自信に満ちていることであろうか。このようなこどもたちが、いつの間にか、規格品

的な人間、模倣だけの上手な日本人になってしまう現実は、何を指摘するであろうか。わたくしたちおとなが、どこかで、彼らの創造性の芽をつみとるか、ゆがめているとしか考えられないのである。

自分自身の生い立ちを振り返って見ても、同様の苦い反省がなされる。幼児期には、あんなに伸びのびと楽しんで画いたのに、いまは、レース編のデザイン一つ自由にならぬ出せない。何事をするにも先ず、他人がどう思うだろうかという心配が先行する消極的態度に、愛想をつかしながら、今更どうすることもできない。また、学校で習った歌を全部、子どもたちに教えてしまうと、「もう、教材が種切れになってしましました。」と泣きついてくる保育科卒業生や、毎年夏になると、講習に出かけて、秋の運動会の材料を仕入れるという先生方に接

するたびに、こんな非創造的な保育者が（もちろん、私自身を含めて）どうして、幼児の創造性を育てることができらるだろうかと、心が痛むのである。

では、「創造性のある幼児を育てる」保育者の創造性は、どのようにして培かわれ、保育の現場では、幼児の生活と発達成長に、どのような形で関連するのだろうか。この問いを、教育の創造性を強調しつつ現今のアメリカの幼児教育の方向に眼をむけながら、保育内容に關する具体的な問題の上に投げかけてみたい。

最初に、**絵画製作の領域**をとりあげて見よう。私たち日本人にとってなつかしい思い出として生きている折紙、幼稚園のおしごととして、かつては重要視された折紙、そして創造的でないということ論議され、理論としては理解しながら、その安直さと、おとなの郷愁から、未だに用いられている折紙細工がアメリカの教師たちにはどのように受けとられるかという興味ある課題について、私の経験を述べたい。

昨年の夏、ニューヨークのコロンビア大学ティーチャースカレチの夏期講座の一つに、「幼稚園と小学一年生教師の協議会」という変わった形式の講座があり、約三十五名の参加者で、二週間の討議が行なわれた。その一日に絵画製作のテーマの日があり、午後の二時間ほどが、参加者全員の、製作素材の発表に当

てられた。私の用意して行ったのは、折紙と夾纈染（紙タオルを用いたもの）であったが、メンバーの中で、もう一人、折紙を発表した人があり、彼女は南米の一小国から来ている学生だったことから、興味ある討論が展開する結果となった。彼女の発表紹介したのは私たちにもなじみの深い、船やヨット、それに帽子などの折り方であり、私の方は、紙を折ると、筋がついたり、立体的になったり、いろいろ形が連想されたりすることを発見する三才児の経験について説明したのであるが、双方のアプローチは違っているようであり、実は、両方とも創造的であるという批判をいただいた。そして、アメリカ人教師たちが異口同音に言ってくれたのは、「折紙は、かびくさいフレールベルの遺物か、東洋の美術工芸と思っていたが、このような使い方をすれば紙という一つの素材の新しい面が発見できる。」という批評であった。そして、この先生たちは決して、わたしたちに、舟や帽子や鶴の折り方を教えてもらおうとするのではなく、また、色紙を売る店を紹介してもらおうこともしなかった。ここに、私は、彼らの中に徹底している創造性をまざまざと見たように思う。

音楽リズムの領域でも、この傾向は明らかである。歌とおどりで賑やかに明け暮れる日本の幼稚園の通念をもって見ると、ピアノのない保育室や弾けない先生がざらにいる欧米の幼稚園

は、物足りないと感じる人が多い。しかし、真の音楽教育、リズム訓練は、鍵盤楽器と、振付ダンスだけに頼るのではなく、

もっと広く豊かな教材教具を用いるべきである。そして、子ども自身が、音楽の世界を探索してゆくように、教師は指導してやらなければならない。この意味あいから、音楽リズムの領域における創造性をつちかうには、先ず既成の楽器や、伝統的にあたえられて来た歌曲にとらわれずに、子どもの発達の実態を捉えながら、自由に新しいものを取り入れてみることである。

黒人の多い地区の幼稚園で、子どもも先生も、レコードにあわせてツイストを踊っていた楽しい情景。また、箱やあき缶でつくった打楽器でリズム合奏をして聞かせてくれた保育所のこともたちの姿が、忘れがたい。また、私自身、幼児音楽の単位を取るために、週一時間のギターのレッスンを取らされたが、従来、保育にはあまり用いらなかった弦楽器を、子どもたちが案外よろこぶことを知った。教師もまた、今まで経験したことのない弦楽器のたのしさと、音の美しさを認識するわけである。

キャプテリア保育

以上の例だけから見ても、米国の教育者たちが如何に、創造性の教育を強調し、また実践を試みているかが察しられよう。

そして、米国の教師たちはすべて、クリエイティブであり、したがって、子どもたちは皆、創造性ゆたかに成長しているよう

な錯覚におちいりやすい。が、現実には、そんなに理想通りに運ばないのである。

ある教授が、アメリカの幼稚園の保育内容を評してキャプテリアスタイルだと言われたのは、痛烈であった。即ち、朝、保育室に入ってみると、ちょうど、キャプテリア式食堂のようになり、玩具、絵本、粘土、絵具の類が並べられているのはよいが、子どもは、「今日は何にしようか」と、その中から撰択する自由が与えられるだけである。さらに、キャプテリア食堂の料理の味が大同小異であるように、どの園に行っても、並べられている品物は同じようなものであり、幼稚園生活も二年日位になれば、はじめの頃は生きいきと遊んだこともたちも、これらの教材にすっかり飽きてしまう。

社会性を育てるための経験カリキュラムにしても、お店ごっこや郵便ごっこ、見学などが例年同じように練りかえされたり、朝の話しあいや生活発表が、形式的に行なわれたりしている。いわば、自由とか創造とかいう概念が、具体的に表現される場合、アメリカ的な形に規格化されてしまっているという批判である。大きな遊具や積木、ホスターカラーや指絵具など、また各種の視聴覚教材などが発達し普及すると、これらを用いてさえいれば、子どもの創造性はのびてゆくのだと思ってしまう。そこに、今のアメリカ教育界の悩みがあるようであ

る。何とかして、この規格品の創造性から脱却しようという姿勢は、心ある教師たちに共通のものである。

幼児教育の根源をたずねる旅行セミナー

は、このような教師たちの願いを結果して行なわれた。フレールベル、ベスタロッチ、ルソーの教育思想が、伝統的に生きているヨーロッパの幼児教育機関を見学し、さらに、モンテソリ、J・ピアジェなどの比較的近代の教育実験を見たり、社会保障国の保育所の実態もあわせて学ぶ旅行セミナーである。紙数の関係で詳述することはできないので要点だけに止めよう。

最初に、私たちは、ローマのモンテソリースクールで、従来の幼児教育の概念とは全くちがった形の教育方法に接しておどろいた。

三才から五才までの幼児が、同室で三十人から四十人位いるのに、実に静かに、モンテソリー教具であそんでいる。一人が一種の教具を使うきまりで、お互い同志の会話は殆んどなく、先生は部屋の隅に坐って、助言を求めることが来ると出て行くだけで、この時間が朝から昼まで三時間ほど、その間、十五分位、戸外に出たり、ミルクをのむ時間があるだけである。この徹底的な個別指導、というよりは、自習の形態で、こともは自分の興味と能力を発展させることができる。教師は彼らの助言者にすぎない。助言といっても、必ずしもことばで教え

るのでなく、むしろ、教材教具を提供し、ほんのちよっとの示唆を与えるだけでよい、というのがモンテソリー女史の主張である。

見学の私たちは、最初、この子どもたちの、自分の作業や遊びに熱中している姿に圧倒され、幼児たちが、ひとり文字や数を習得していく過程に眼をみはった。指導者たちの言う通り、この子どもたちは、自学自習を楽しんでいることは確かである。知的発達はアメリカの子どもたちと比較にならない程高いようである。しかし、子どもの生活と教育は、これだけでは完全ではない。とくに、社会性の教育、情緒的な表現の機会、健康体育への配慮に欠けていることは明白である。そして、モンテソリー教具の優秀さは認めるが、その使用法を限定せず、もっと自由に創意ある使い方をさせなければならないというのが、私たちの批判の大部分を占めた。

次いで、ルソー二百五十年記念祭を祝うジュネーブでは、ピアジェの実験幼稚園をたずね、西ドイツのフレールベル主義の幼稚園とともに、古い教育原理が、新しい時代と環境に生かされている実際を見て、何かしらほっとした。しかし、最後のコペンハーゲンでたずねた二ヶ所ほど感銘深かった施設はない。

世界中に有名な北欧の困々の、至れり尽せりの保育所をたずねて、そのすばらしさにアメリカ人でさえ声も出なかったが、

そのこのどもたちの何となく淋しそうな表情、あまりに多い指なめには、首をかしげさせられた。

その後で訪問したのが、ジャンク・ブレイグラウンド。訳して廃物利用遊園地とでも言おうか。アパート群の近くの一角に、一千坪位の空地があり、そこに、文字通り、木片、古タイヤ、土管などが集められ、このどもたちのつくったハンガローマがいの小屋が立ち並んでいる。十年前、ここはただの空地で、アパートを建てた会社の所有地、建築の廃材が山とつまれていた。そこに集まって来たこのどもたちは、たちまちこれらの廃物をつかって遊びはじめ、毎日あきずに通って来る。一人の婦人が、このこのどもたちの楽しそうにあそぶ姿に気づき、なにかと助けてやっているうちに、このどもたちは廃材を用いてすばらしい小屋をたて、町をつくってしまった。この婦人は今は市の職員となって、フルタイムでこの遊び場のために働いているが、どんどん成長して行くこのどもたちは、年長になったものからリーダーシップをとり、すべて自主的に遊園地の運営をしているそうである。冬の長い国であるから、雪どけを待って、四月の始めに、全員が集まって、今年度の土地の割当を決め、町づくりの計画を立てて、各自の小屋の建設にとりかかる。六月にはでき上り、夏中たのしくあそび、十一月になると、全部とりこわし、来年を待つのである。三年程前に、この子どもたちは、

冬の間、集まる家がほしいということになり、材料を建築会社からもらいうけて、自分たちで本格的な建築の集会所と台所、木工製作室を建てた。

理解あるおとなの助けがあったとは言え、この創意あふれた遊び場が新しい境地を探索してやまないこのどもたちの欲求から創り出されたという事実には、私たちは何よりも強い感動を味わった。

このような例は、学校教育のわくの中では適用できないかもしれないが、このどものもつ創造の芽ばえを尊重し、それを育ててゆこうという態度には変りないであろう。あまりにも生きいきした現代のこのどもたちの創造性を育てるには、私たち自身の創造性の貧困さはふさわしくないかもしれない。しかし、アメリカ人の教師たちが、謙虚に、そして冷静に現状を見つめ、批判し、広く深く研究しようとする態度には学ぶべきであると思う。

「創造性のある幼児を育てるためには」、保育者自身が、自由な、そして個性ゆたかな一人の人間として成長し、教育という仕事そのものに、創造のよろこびを感じる者にならなければならないまい。

* *

(平安女学院短期大学)